

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 20 日現在

機関番号：33801

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26770092

研究課題名(和文) 日本近代文学における翻訳と創作の創造的連関

研究課題名(英文) Study on the connection between translation and creation of modern literature

研究代表者

戸塚 学 (TOTSUKA, Manabu)

常葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：70633014

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：堀辰雄が遺した旧蔵洋書のうち、特にコクトーやプルーストに関する書物に行われた書き込みがどのようなものかを明らかにした。堀が翻訳作品として発表したものと、旧蔵書への書き込み箇所との関連性を考察し、一部については書き込みの時期について推定した。また、こうした書き込みと堀の翻訳行為の関連性、創作との関連性を考察し、堀辰雄が洋書の丹念な読み込み、書き込み、翻訳という過程を経て、創作へと結実させていく過程を解明した。

研究成果の概要(英文)：My research focuses on the notes Hori Tatsuo left on some of the western literature books in his library, especially those by and about Jean Cocteau and Marcel Proust, and considers their characteristics by comparing them with his own literary and translation works. In so doing, the process of his creating literary works (including note-taking on as well as close reading and translation of the works of those writers) is clarified.

研究分野：日本近代文学

キーワード：翻訳 モダニズム 堀辰雄 日本文学 プルースト コクトー

1. 研究開始当初の背景

日本近代文学はその草創期以来、翻訳との相互的な影響関係において自己形成を行ってきた。柳田泉『明治初期の翻訳文学』(松柏館書店、昭和10年)以来、翻訳が近代文学のジャンル生成に創造的に関与してきたことは、多方面から既に論じられてきた。明治期を中心に書誌研究・原典研究などが進められてきた一方、昭和前期の作家の翻訳と創作との連関、とりわけ文体や表現の具体的生成過程に焦点化した研究はあまり例を見ない。比較文学研究者の井上健の『文豪の翻訳力』(武田ランダムハウスジャパン、平成23年)が数少ない先駆的な研究成果である。昭和期の文学者の翻訳に注目し、昭和前期の文学表現が異言語との接触によってどう変化したかを解明することは、文学表現の史的変遷を捉える上で重要な課題である。

こうした視点から、申請者は堀辰雄(1904年(明治37年)-1953年(昭和28年))の文学に注目して研究を進めてきた。昭和初年代~十年代に活躍した堀は、自身の翻訳行為を媒介に、同時代の世界文学から影響を汲み取ってきた。とりわけ、フランスの作家アポリネール、ラディゲ、コクトー、プルースト、ドイツのリルケらの作品を自らの手で翻訳し、そこで創出した文体によって自らの作品を作り出した。つとに比較文学研究者の西村靖敬が「堀辰雄の翻訳と創作」(『千葉大学人文研究 人文学部紀要』平成16年3月)によって堀のコクトー翻訳と創作との関連を論じたが、堀辰雄特有の翻訳のあり方を明らかにし、堀の翻訳履歴と創作史とを俯瞰的に総括して文学者の翻訳一般の問題に開く視点は提示されてこなかった。

申請者は「堀辰雄「物語の女」論 昼顔はどこに咲いているか」、「堀辰雄「不器用な天使」論 翻訳から小説へ」、「堀辰雄のプルースト翻訳」、「堀辰雄の詩的モダニズム 翻訳・詩・コント・エッセイ」、「堀辰雄『風立ちぬ』論 「死のかげの谷」におけるリルケ翻訳」などの成果により、堀辰雄が西洋文学・日本古典を翻訳し、自作の中に原典の言葉を翻訳・引用して鏤める「作品内翻訳」を通し、新しい小説の言葉を創造してきたことを明らかにしてきた。また、一連の「堀辰雄旧蔵洋書の調査」により、堀旧蔵アポリネール、ラディゲ、コクトーの書物のどこにどのような書き込みがあるかを明らかにし、さらに堀が辞書を片手に単語の意味を書き込み、傍線を付した箇所を自らの創作の文章に換骨奪胎して取り入れている様を具体的に指摘してきた。

ただし、従来の申請者の研究は、初期作品の生成過程に翻訳が関与していることを解明するにとどまり、翻訳を通して取り入れられた文体が堀の作品、とりわけ中後期の代表的な作品にどのような富をもたらしているのかを十分に解明できなかった。特に語りや

人称形式・時間構造の点で、堀の翻訳行為が日本の近代文学に新たな要素をもたらしていることに踏み込めなかった。また、プルーストなど堀が中・後期に強く影響を受けた蔵書への書き込み調査を十分に進められなかった。以上の課題を踏まえ、以下のような目的を設定した。

2. 研究の目的

(1)日本モダニズムの興隆期である昭和前期の文学・文化状況について、翻訳と創作を同時並行して行った堀辰雄の文学営為を視点に、西欧語(フランス語)の翻訳とその創作化を通し、文学において日本語の新しい可能性が開拓されていることを明らかにする。

(2)堀辰雄の代表的作品が、堀が小説やエッセイの内部で翻訳を部分訳・引用する「作品内翻訳」を通して獲得した新しい小説文体によって形成されていることを詳述する。また堀が異言語から汲み取って適用した表現が、作品の人称形式や時間などの構造に関与し、日本の近代文学に新しい富をもたらしていることを明らかにする。

上記の目的のため、具体的には以下のような目的を設定した。

堀辰雄のフランス文学翻訳と『風立ちぬ』の小説言語の研究

堀辰雄が翻訳したプルースト『失われた時を求めて』を分析し、フランス語特有の半過去時制やジェロンディフの用法がどのように訳されているかを明らかにする。これを踏まえ、堀辰雄の代表作『風立ちぬ』を読み解き、作中の文末表現や時間構造が従来の日本語では達成できなかった、微細な瞬間を拡大して定着する表現を獲得していることを明らかにする。現在、横浜の神奈川近代文学館には堀旧蔵の『失われた時を求めて』の原書が保管されている。同書には赤鉛筆や緑鉛筆で下線や傍線がほどこされ、さらに作品細部の言葉の試訳が空欄に書き込まれている。これらの書き込みの全容を解明した上で、堀辰雄のプルースト関連エッセイや『風立ちぬ』の表現と詳細に対照することで、上記の議論を実証的に裏付ける。

堀辰雄のフランス文学翻訳と『菜穂子』の小説言語の研究

堀辰雄後期の代表作『菜穂子』を分析し、堀がモーリャック『テレーズ・デスケールウ』の表現をどのように変換して作品の表現を作り出しているのかを、翻訳という観点から明らかにする。さらに、『菜穂子』という作品において、主人公の女性及びその夫の内面に多元的に焦点化しつつ西洋風の客観小説(ロマン)の方法がどのように達成されてい

るのかを、如上の翻訳行為を通しての新表現の獲得という視点から論じる。〔 〕〔 〕を通し、昭和前期の文学者が、翻訳行為を通して小説言語を新しく生成したことを、日本のモダニズム運動の成果として新たに提示することを目的とした。

日本近代文学研究は、比較文学研究における翻訳論の蓄積や、近年の注目分野である翻訳学(translation studies)の理論的な成果を導入することにこれまであまり積極的ではなかった。逆に、比較文学研究は、個別の作家の作品への影響論を詳細に行ってきたが、これを作家論や文学史に有機的に関連させてこなかった。だが、今後はこうした研究分野の間の溝を埋めることで、お互いの研究方法の短所を補完し、長所を互いに取り入れていく必要がある。堀辰雄に視座を置き、日本近代文学研究の側から昭和作家の翻訳を捉え直すことで、翻訳という視点から両者の研究方法を統合することを目指す。堀旧蔵の和洋書の書き込みを調査し、作家が原書を読みながら書き込みや試訳を行い、作品の言葉を練り上げていく現場の様態を明らかにする方法をとっており、近代文学研究に翻訳研究を導入する際の、基礎的な方法論を提示している。今後、堀の小説を比較文学的な見地から考える際に、従来のような作品間のモチーフの類似や手法上の影響関係ではなく、作家の翻訳行為がクローズアップされることになるだろう。また、これまで堀旧蔵書の書き込みは、渡部麻実『流動するテキスト 堀辰雄』(平成21年、翰林書房)を除き、ほとんど参照されてこなかった。それは、言語の壁があるという理由だけでなく、書き込みを自らの論に引きつけて恣意的に用いるやり方にとどまってきたからと考えられる。書き込みを一次資料として公開することで、今後は作家の翻訳行為や創作行為の源泉として、堀による旧蔵書の書き込みが参照されることが期待され、そのことも本研究の目的となる。

3. 研究の方法

神奈川近代文学館所蔵堀旧蔵洋書書き込みの調査を通し、フランス文学関係書物のうち、堀の創作と密接な関係にある書物(とりわけ、ブルースト、モーリャック関係書物)への書き込み箇所を明らかにする。堀がどのように原書を読み込み、またそれを創作に生かしたかを明らかにする。書き込み調査をまずは一次資料として雑誌『奏』に連載し、研究者が書き込みの実態を把握できるようにする。

以上の調査を踏まえ、堀辰雄中後期の代表作『風立ちぬ』、『菜穂子』を翻訳という視点から論じる。堀辰雄がフランス文学の言葉を自作に取り入れ、新しい人称形式や語りの構造、とりわけ時間意識を作り上げていく過程を、作品内翻訳という視点から一括して捉え、堀辰雄の創作と翻訳行為の交錯点を浮かび

上がらせる。

4. 研究成果

(1) 博士論文「堀辰雄研究 翻訳から創作へ」

科研費課題番号 24820060 以来の研究成果を現時点でまとめた。

このうち、特に、「第二部モダニズム文学の翻訳」の第三章「聖家族」論 ラディゲの翻訳、第四部『風立ちぬ』論の第七章『風立ちぬ』論 小説の時間、補論堀辰雄旧蔵洋書の調査のうち、「第十一章 コクトー関連書物」の部分が本研究課題の成果である。

「聖家族」論における成果については、のちほど学会発表の成果の部分で触れる。

堀辰雄の『風立ちぬ』論では、『風立ちぬ』を「序曲」と「冬」という二章の関係性に視点を置いて読み解いた。従来、『風立ちぬ』は連続する五章仕立ての小説だと自明視されてきたが、そのように読むと同作の特異な時間構造を見落とす。『風立ちぬ』前半三章における時間性と後半二章における時間性の差異を分析し、こうした時間性の差異が、作中作という構造によってもたらされていることを指摘した。前半三章が「私」によって書かれた時間、後半二章が「私」が書く時間という構造的な断層が作り出されることで、婚約者の死を書くことで生きる小説家というアンビヴァレンスが作中で内面的に解決されていることを指摘した。

「補論 堀辰雄旧蔵洋書の調査」では、神奈川近代文学館蔵堀辰雄旧蔵洋書の書き込み調査を報告した。コクトー関連二十三冊の書き込みの有無を調査した。堀辰雄が自身の小説に取り入れた箇所の下線を引いていること、訳出した詩の本文に折り込みや印、同じく巻末目次に印があること等を明らかにし、書き込みの時期が不明だった堀の旧蔵洋書が堀最初期に読まれたものである可能性を指摘した。また、堀がこれらの洋書の読書に用いたフランス語の辞書の推定、単語の訳を書き込むなど書き込みのあり方の分類、添付された書店票等の補足的な情報を報告した。

(2) ブルースト関連書物の調査

ブルースト関連書物のうち、特に『失われた時を求めて』の調査に着手した。ただし、同書への書き込みが予想以上に多く、しばらくはブルースト関連書物の蔵書の書き込み調査を継続することとした。今回は、『失われた時を求めて』の第一巻の書き込みを調査した。この本では、堀は明らかにそれまでとは異なる書き込みをしている。ブルーストの『カイエ』を参考にしつつ、筋や登場人物についての小題を頁の余白に付した上で、各所に下線を引いている。さらに、それらの下線部分の試訳ないしは要約的な翻訳を行って

いる。プルーストに関してはエッセイ等の中に一部翻訳が発表されているものの、このように旧蔵書の中で一種の翻訳行為が行われていることはこれまで気づかれていなかった。今後、続巻の書き込み調査を継続することで、堀の旧蔵洋書における翻訳行為の様子が明らかになっていくものと思われる。なおこの点については、科研費課題番号 16K16772 で行うつもりである。

(3) 「聖家族」の分析

日本近代文学会春季大会で、ラディゲ旧蔵洋書の調査に基づく、翻訳行為に視点を置いた「聖家族」論の発表を行った。

堀がラディゲ『ドルジェル伯の舞踏会』のフランス語の翻訳を通して、新たな文体を作り出す過程を分析する。堀はラディゲに関する概説的なエッセイを、『ドルジェル伯の舞踏会』原文を翻訳・集成する形で書いていることを指摘した。さらに堀が『ドルジェル伯の舞踏会』を翻訳・引用する形で「聖家族」の中に取り入れ、指示語による前述の要素の連続的な継承・理由提示の副詞句・無生物主語構文の組み合わせにより、言葉の上で因果が連鎖する文体を作り出した。この文体によって、堀が生涯にわたりこだわり続けた、母娘と青年と作家の恋愛関係が作り出される過程を分析した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

「堀辰雄旧蔵洋書の調査(五)コクトー」
戸塚学
〔「奏」(28) 72-107〕2014 年 6 月

「堀辰雄旧蔵洋書の調査(六)コクトー」
戸塚学
〔「奏」(29) 103-134〕2014 年 12 月

「堀辰雄旧蔵洋書の調査(七)プルースト」
戸塚学
〔「奏」(30) 67-90〕2015 年 6 月

「堀辰雄旧蔵洋書の調査(八)プルースト」
戸塚学
〔「奏」(31) 128-157〕2015 年 12 月

〔学会発表〕(計 1 件)

堀辰雄「「聖家族」論 ラディゲ翻訳を視点に」(日本近代文学会春季大会 於聖心女子大学) 2014 年 5 月 25 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

戸塚 学 (TOTSUKA, Manabu)
常葉大学・教育学部・准教授
研究者番号: 70633014